

## □村による生贄の歴史

ある村娘が未婚ながらも、子を身籠った。

生まれた子に奇妙な耳が生えていると知ると、村娘は自害した。

狐の耳を持つ男児を誰が始末するか口論をしていたところに

法師が来て山の神社へ連れ帰り、育てるという。

妖狐が生まれた年から村は豊作になった。

法師は大層妖狐を愛したが、邪のものであることに代わりはない。

そのころには妖狐は村の邪神様として崇められていた。

法師に育てられた妖狐は優しい青年であったが、

妖狐の発情期には妖狐の理性が飛び、破壊の限りを尽くした。

見かねた法師は一夜のみ、村の女人をあてがうように村人告げた。

時は流れ、法師の死後

意図せぬ形の生贄奉納に変化してゆく。

孤独な時は心を蝕む。

妖狐は法師の愛を当の昔に忘れた。



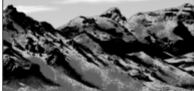


ある日異世界に  
飛ばされた

その地域では  
山に住む邪神に  
生贄を捧げる  
風習があった



私は生贄として  
奉納されてしまった



村ぐるみで  
食事に毒を盛られ

忍び寄っていた



目を覚ました時には

「おぞましい」「ナニカ」が







えーと

村人じゃないから  
知らないけど…

私は飼ってた  
犬に似てて好き

かも

お前には

俺が化け物に  
見えないのか

見えないね

むしろ

きれい

